

野に臥す者

室生犀星

青空文庫

経つねゆき之ははごの母御は朝のあいさつを交したあとに、ふしぎそうな面
持でいった。

「ゆうべそなたは庭をわたって行かれたように覚えるが。」

「いえ、さようなことはございませぬ。誰かをご覧ろうしましたか。」

それは確かに人かげを見うけ申した。月がなくなつただ星あかりで
しか見えない池の裏手の、萩はぎ芒すすきの枯れ叢むらの間をぬけて行つた
者がいた。かぶり物をしていたから顔はようは見られなかつたが
と、母御はそなたではなかつたのかといった。

「ではやはり女であつたらしい。」

「女とは？」

経之は女とは、御達ごたちのうちの誰かであつたか、どうかといつた。

「それから一刻ひとときのあとに寝もやらぬうちに、ふたたび庭をよぎつて戻つて行く姿を見ましたが、池の径みちから裏庭へ、つま戸の開く音がしたようにも覚えます。」

「するとそれは女部屋の方から出た者としか覚えませぬが、夜半に女の身で庭に出るとは考えられませぬ。」

「わらわもゆめかとも覚えるが、ひと夜に二度も姿を見うけては、ゆめではあるまい。」

「たしかにつま戸の開く音がいたしましたか。」

経之はつま戸の軋きしりの固いことは知っていたから、どのよう
に、注意ぶかく開けても、更ふけた夜半には一応のささやかさであろう

とも、音を絶つことはないはずだった。経之自身も、つま戸の軋りは頭の中に覚えがあった。

「二度目は閉まる音もいたしました。あの戸は永い間きしついでよく音をきき分けることが出来ます。」

「して御達ごたちらのようすにかわったこともござりませんでしたか。」

「どの女であるか分らぬが、そちのころ当りはどう。」

「一向に見当がつきませぬが、よく心得て置きます。」

「よほど大胆な女であろうの。」

「夜の庭をよこぎることはいままでの御達ごたちらも、怖こわがつているくらいゆえ、よほどの決心でもなければ庭わたりは女の身では出来ませぬ。」

経之はたちばな、はぎ野、まゆみ、たえ、すおう、とかぞえた御達のなかで、すぐ頭を射てくるものははぎ野だった。長身の黒髪は海藻に似たかがやきを見せていたし、すべすべした手足は経之自身にもふかくめでられた、その感じの生きいきとしたものを、彼自身のなかに思いあてることができた。そのような庭わたりのできるような素早さをつつんでいる者は、はぎ野のほかには見当らなかつた。何よりもそのあでやかな色気は、どうかすると、すぐにも燃えあがるよい血色をたぎらせているのだ。経之ははぎ野のうつくしさが困ったうつくしきであることを知ると、もうかれの頭では、はぎ野のほかの女でないことが分った。しかし経之は母の前では、軽率にその名前を口にすることを控えた。もしその

名前を指すことを一度でもそうしたら、それは母の眼の下を離れられないはぎ野であることを、注意ぶかく心にとめた。それに、はぎ野は母御の仕えだったのだ。

「経之。」

母御はあらためていった。

「こたび初めての庭わたりでないことを今から考えると、覚えがありません。」

「折々お見うけなされたか。」

「三たび四たびではないように覚えます。月のない夜がえらばれているようだ。」

母御はあれは町方から上った者だが、武家の者のように立居たちいふ

振舞^{るまい}が正しいといった。経之は、ただうなずいて見せた。去秋、町方から来て以来、過失もなく、どこかに聡明をかくれて持ったようだが、上^{うわ}べには、それが見られなかった。御達^{ごたち}仲間のつきあひもよかった。ただ、そのきらびやかな顔立にあるものは、ことごとく危険なすぐ男の手にわたされるようなきらびやかさであり、それがはぎ野からいくら拭^ふいても、拭ききれないものだった。恐らく、はぎ野の顔立ばかりでなくその心にも、そんな危険に類した浮いたようなものがあるのだらうと、経之はいった。彼女が先刻、白湯^{さゆ}をはこんで来たときに、早くも瞼^{まぶた}した^{した}下のつかれをうすくはいだように見えていたことで分った。しかも、彼女はそういう自分の顔の中にあるつかれたものを知っていることだった。知

つていてその化粧よそおいを直して来たこまかさが、経之にやはり並大
 ていのはぎ野でないことを、このことだけを見立てても、わかっ
 た。もう、どこにも、眼は勿もちろん論のこと、寝不足とか疲労とか、
 ものだるさというもののあとが、見られなかった。

しかしはぎ野がゆうべ庭先をわたつたとすれば、何処どこに何者の
 もとに忍んで行つたものであるうか、弟の定明さだあき以外には、はぎ
 野の忍んでゆきそうなところはない、ゆうべは定明は館の北にい
 た。非番で宵早くの食を終えると引きこもっていて、経之は顔を
 合さなかつた。

定明の北のやかたは庭をよぎり、松と柏かしわとにかこまれていて、
 夜は仕えの者も遠ざかつて、ただ一人の唾おきなの翁がやかたの外部屋

に寝泊りしているだけで、誰も行き来はしない。何をしようが、何者が忍ぼうが、それは定明以外の者の知るところではなかつたのだ。

経之は母のもとを去ると、中の島を隔てた池の向う側を歩いて行つた。冬枯れの形よく隈取くまどられた径みちは、まだそのまま掃かれたことがなかつた。経之はていねいに落葉のかさなりを見て行つたが、そのかさなりの外はずれたあたりに、人の歩いたあとがあつた。しかも、落葉のずれはあたらしい些いささかの乱れを見せていたが、紛まごう方もない女の足あとだった。経之は池をまわり、広庭につづく、ひとつは塗籠くらへ、ひとつは定明の館に通ずる径を行つた。落葉のみだれは館のあたりまでつづいていたが、塗籠の方に歩いたよう

すは見られなかった。

経之は北の館の前に立つてみたが、そんなことで、女の忍びが分るものではない。経之が去ろうとした時、突然、やかたから定明が立つて出て、経之のすがたを見とめた。定明の眼は皮肉な陰けわしい一瞥いちべつのかがやきを見せ、言葉はほとぼしるように衝ついて出た。

「これはお珍らしい、兄上のお越しとは全く思いがけない。」

「そちをたずねた訳ではないのだ、春も近いから庭方を入れずばなるまいと思つたからだ。」

「ほう、兄上ご自身のご検分か。」

定明の言葉はすぐ食い付いて来た。

「下見して悪いか。」

「何と致しまして、ご苦勞にぞんずると申すのでござる。」

ぞんざいな言葉づかひまで挑いどんで放れないものを見せ、経之は異腹の兄弟とはこうもあろうかと、顔かたちの違い、性情の違い、肉体の違いを何故か急に頭にうかべた。仕えの女腹から出た定明は、父の歿後、母の許すところとなり引き取られて育つたが、異常な野性と、放ほうらつ埒の気性は経之とはまるで違つた性格をひらいて見せた。動物にたいする憐愍れんびんの欠乏は勿論、仕えの女たちへのしばしばの乱行もそうなら、碗わんをもつて酒食らうことも殆ど町方破落戸ごろつとえらぶところがなかつた。彼のまことの母の春日野かすがのは、弟が引き取られると同時に行方が分らず、津の国で見た者がいる

ともいい、大和やまとの宮司ぐうじの家で見た者もいるといい、まぢまぢな噂であつた。乱倫なものと仕え女のなかでも、下の方にいた春日野は、邪魔者の手のかかる赤ん坊の始末がつくと、幾人かの男の手からこぼれてゆくように、津や大和にさまようて行つたのである。定明は自分の生い立ちを知ることと、彼自身の放蕩無頼ほうとうぶらいとはよく調和されているほど、反省も顧慮もしなかつた。肉体にくいこんでゐる母のおおぐろい血は、彼に何のわざわいを見せつけるのか、彼はひまさえあれば、北のやかたで飲酒にふけていた。

「近頃、宮仕えの怠りが酷ひどいぞ。」

経之は宿醉ふつかよらしい弟の顔を見た。

「面白くない宮仕えをするなら、土民になり下つた方が気が楽で

「ごぎる。」

「勤めはやめる気か。」

「その日まかせにごぎる。」

「それでは我が家にもとどまらぬつもりでいるのか。」

「もとより。」

「よくも、ぬけぬけと嚙たわごと言ことを続けた。館を出ていずれに越そうとする。」

「野は何処いずこも開け放しだ。」

「いかがして飯いひを用意する、飯は野に落ちてはいぬぞ。」

「兄上の飯をはむくらいなら、野に出て甘い草木をかじり申していたらさぞ晴れがましい気がいたそう。」

「この兄の飯をくらわぬというか。」

「とうから厭いやになつてござる。」

「何故すぐさまに出て失せぬのだ、そのようにいやならば、とかく申さずにかたを附けたらよいのに。」

「いずれ参ります。」

「そちらしくないことを申す、口くちまえ前を覚えて置け。」

「わすれ申さぬ。いずれは野に暮らす者にとつて何の嘘うそがございましょう。兄上の飯いひはもとより母上の飯にもお言葉にも、もう、こりこり申している。」

「母上のことをあげつらうのはよせ、そちの幼少の折から眼をかけてつかわされた母上のことをあれこれと申すと、口もひんまが

るぞ。」

「何の、われにはあずかり知らぬ母上のことだ、兄上にはまことの親しみはごごろうとも、われにはまるで関係のないことだ。」

「母上のことを申すな、恐れ多いではないか。」

「兄上には恐れ多いかはぞんぜぬが、われには何のかかわりのない母上、兄上がわれの身の上になつたら何も彼も分り申そう。」

「慮りよがいもの外者、耳が腐る。」

経之は手をあげて、定明の頬を続けさまに撲なぐつた。あおざめた定明は兄の肩先をつかんだ。

「撲ぶたれたな。」

「汝なんじごとき畜生道の言葉をあやつる奴やつは、撲なぐるよりほかに手の施

しようがないのだ。張り手を受けろ。」

経之はなお手をあげようとした時、突然、癩癥かんぺきに逆上した定明はやかたに飛びこむと、小太刀こたちを携えて素足で庭石の上におりた。手を柄つかの上にわなわなと震え、もう、ものもいえぬほどの昂たかぶり方だった。

「莫迦者ぼかも、そのざまは何だ。」

経之は近よると、小太刀の上の手をちからを込めて、はたいた。「この館の内でそんな太刀が抜けるか、たとえば、われにかかつて来ても何の勝が得られるのだ。」

さすがに定明は、小太刀を持ち出したことが、昂たかぶりすぎて気恥かしかつた。だが、引くことの出来ないぎりぎりの間に兄弟は立

っていた。

「勝はいずれにあるか、そんなことは当あてにしていけないのだ。」

「行け、莫迦者。」

経之は去った。

これ以上昂あがりらせることの無益は、定明の短慮焦躁の日常を知っていたから、経之は懲こころしめることをしないで去って行つた。

その夜も煤すすをながしたような暗さが、凍しみて石のように固い空模様にまじって、庭は水底の冷えを行きわたらせていた。つい、三日前の朝、経つねゆき之は裏の井のほとりに衣裳が打ちかけられて干されてあるのを見た。それは、はぎ野の衣裳で、夜着るものらし

かつたが、裾すそには一様に引かれた泥のにじみが、氷をやぶつてわたつたらしく、水気をふくんでいた。はたしてはぎ野の衣裳かどうかを、その翌晩に衣裳がえをしているのを見ると、やはりそうかと思つた。庭わたりをするなら、定明のやかたに行くよりほかはなかつたのだ。

経之は仕えの者がやすみ、夜のあかりがほそぼそとかよう下のわたどの方に、枕かた耳まくらみみを立ててやすんでいた。庭は藪しとみのあきから見られ、音はどこからも聞き入られるほど、館の中は寝しずまつていた。ちようど、経之が枕をかえそうとしたとき、下のつま戸がすうと息を引くような音をたてて引かれた。そして次にはまた同じい息を引くように、つま戸がしめられた。

経之は起きあがった。部しとみのあいまに、はぎ野が庭に出ようとし、裾をからげ、髪を胸前に垂らしながら立っている姿を見出した。あれほど多い仕え女の間を抜け出すことの困難さを、あぶらをながすようにすべ迂り出したはぎ野の大胆さは、凶抜けた庭わたりだった。母の許しのあつたはぎ野とのあいだも、他の仕え女を出代りさせたうえ、同じ武家の姫となぞらえて迎えるような手筈てはずは、とうに、はぎ野は知っているはずだった、母からの衣裳や髪化粧の具うちかかけ、桂うちかかけや襲ねの数々もひそかに母からわたされていることを知っている。経之は、はぎ野の身体からだにすら信仰をもっていたのだ、だが、もはや彼の眼に宵のほどに逢つたはぎ野の言葉すら、それがまことの言葉であるとは思えなかった。

経之は先まわりして庭に下りると、池のうしろに身をかがませた。定明のもとに通う時は池の裏側を通らなければならぬし、勢い経之のかがんだあたりに姿をあらわすことになるのだ、経之はへいぜい気のつかない庭の風物が、この瞬間に一変してくることを感じた。見なれている幽谷ゆうこくのしらべをつくる松しょう柏はくの類は、少しも経之に常日つねひ頃のしたしい風景にならずに、どこか、素っ気ない他処よその庭を見るようなはなれた気持であった。こんな冷たいよそよそしい風物を眺めることは初めてであった。経之はいやな沈んだ気分から、そつと呼んで見た。此処ここは一たい何処どこなのだ、何をしに自分がこういうところに跣かかまねばならないのだ。風はなかった。それだけに酷むごい冬の名残りがきびしく、凍しみを

耳や足もとに、つたえて来た。やつと庭に出たはぎ野は、庭に下り立つたと見ると同時に、非常に素早い足どりで萩の枯れ叢、松の木の間、冬も緑をもつ低い木々のあいだを縫うて、殆ど走るがように急ぎ足で行つた。たくみな陰をえらんだ縫い方は、人であるよりも、なにか、暗のくずれが^{よど}濺んでながれているように、紛れやすいものであつた。経之は近よつたはぎ野が下枝の張つた一位の木から、ほっそりとうかび出た姿はまぎれもないはぎ野であることを、近々と、はつきりと見取つた。

「はぎ野。」

突然、はぎ野は立ち停まり、よろけるように、二、三步あるき出したが、驚きと恐怖とで足が前にはこべないふうだつた。

「はい。」

やはり低い、低いために注意ぶかく凝り固まったような、はぎ野だった。

「いずれに参らるる。」

「……………」

経之はぐいぐい近寄って行つた。夜眼よめにも匂うような若い女の熱い顔は、実際、しきりに香気を夜気のなかにほとばらしているのだ。

「この夜半にいずれに赴おもむこうとされる。」

返辞はなく、はぎ野はしだいに重く、うな垂れた。ほとんど、胸もとにくっつくほどであった。

「お返辞あれ、黙つていては訳がわかり申さぬ。」

もう、はぎ野はうごくことも、声を出して返辞をすることも出
来ないところに、お 趁おいこまれていた。

「北の館に御油をつぎにまいます。」

「夜半に油の心配か。」

その時、だしぬけにはぎ野らしく、もう、永居してはと、りこ
うにも踵くびすをかえそうとした。そしていかにこの場を遁のがれるために
油の説明が効いたか分らなかつた。

「では失礼を。」

その言葉はつめたかつた。

「待て、身どもと話をいたしてゆかれぬのか。」

「もはや夜半になりますゆえ。」

「定明がもとにこれから赴こうとするほどの御身おみが、われと話さ
えまかりならぬというのか。」

経之は赫かつとして眉をあげた。

「はい、定明様は定明様、あなた様はあなた様、別ようにござい
ます。」

「それで……。」

経之はせき込んで叫んだ。

「わたくしはこれにて罷まかります。」

落著いてあきらかに嫌いやがったふうを見せたはぎ野は、そのまま、
うしろ向きになって歩き出した。まるで経之などはぎ野の頭の中

にいないというふうだった。

「はぎ野。」

返しの言葉がなかった。

「待て。」

経之はその時、手にいじっていた火打石の一個を、殆どそれが決定的にそう抛打なげうつたために用意されていたように、こちら向きになつたはぎ野に打ち当てた。

「あ。」

「うごくな。」

しかし素早いはぎ野は、叫び声をあげると同時に池の向う側に姿を消した。たしかに、額に火打石は掠かすめたのだ、手応えは充分

にあったのだ。もしかりに額に当てられたとしたら、傷を負わしはしなかったかと、なぜか、きゆうに経之の心は咎めたが、大ざっぱに、そして投げやりな気持ちに変わって行つた。その時はその時だ、何事も遅いと彼は意地悪い猛り立つもののなかに荒々しい息をついた。

経之が間もなく踵を返そうとすると、不意に、全くそれは先ほどのからの機会を待ちうけたように、北のやかたの方から、姿は見えないが、叢のくさむらかげから起つた声が、経之のうしろから叫ばれた。

「誰か。」

経之は声の方向を眼で辿つたが、きゆうには所在が判らなかつた。

「そういうのは何奴か。」

「そちらこそ何者だ。」

声は定明、そして彼は池のはじの方にある植込を前に控えて立つていた。

「経之だが、いまごろ何用あつて呼び止めたのだ。」

「兄上か。」定明はさらに挑みかかるようにいった。「この夜半に庭にて何をなされていられる。」

「そちこそ何用あつて庭わたりをしているのだ、胡散臭い奴だ。」

「兄上こそ身分がら夜歩きは解し兼ねます。」

経之は冷笑つた。

「女ならもう突き戻した、礫を食わして追い払つたのだ。」

「礫を！」

「たしかに額に打ち当てた、女狐は打たねばならぬ。」

定明は逆上していった。

「兄上、去られい、たとえ兄上であるとも、容赦はできぬまでに相成り申しているぞ、暗さは暗し何を仕出かすか、分り申しませぬ。」

「かかって来るか。」

答えはなく、枯木にこだました人間の声は、固い石を打ちあてるようだった。

「去られい。」

そしてその定明の声は、自分で何をするか分らない警めを、自

らにも、経之にも叫びあうようなものだった。やがてそれは同様な兄経之の昂たかぶった気持と、少しの渝かわりのないものだ。

「汝こそ退さがれ、一刻の後にはどうなるか分らないものが、汝の身に迫っていることに気がつかんか。」

「兄上の身にもそれが蔽おほいかかってござるぞ。」

「たわけ。」

「……………」

彼らは彼ら自身すら知らない間に、相ついで近づいた、そして近づいたということは、それが合図なように重い二人の肉体が揉もみあう機会を、もう、外すことができないぎりぎりのところに追いつめていた。経之は弟の肩先をつかみ、定明は兄の胸のあたり

に手をからませた。それは時間でいえば何分もかかっていた。なかつた。

「去れというに。」

定明は突きもどされた。そこから、再び立ち向えないものが年長者にたいする、ふしぎなおそれになり、定明を疎^{すく}ませ凝^こり固まらせた。彼はちよつと跣^{かか}むような姿勢になつたと思うと、突然、経之は額に重い打撲を感じた。それは定明が跣^{かか}んで起きたときに、すでに用意した沓^{くつ}の片方が非常な速さで、経之の額に投げ飛ばされたのだ。

「卑怯^{ひきせう}。」

経之の声が切れたときに、もう一個あつた火打石の片方が、う

しろを見せて素早く立ち去ろうとした定明の逃走に向つて打ち当てられた。

「た……」

という変な声を立てると、定明は急にしやがむように、その五体を徑みちのうえに崩して行つた。

経之は去つた。彼はたかが女一匹とふたたび心で叫んで見たが、それはもはや虚むなしい瘦我慢やせがまんにすぎない言葉だつた。女は経之を嫌きらつているというあれほどたしかかな言葉があらうか、母がゆるしているのに、女はそむいて定明についているのだ、もう、これ以上には彼の考えることはなかつた。彼は何のために夜半の庭歩きをし、みにくく弟と揉もみ合つたかを考えると、眼は冴さえ心は妙にふ

るえて来た。何度も寝返りを打ち、何度も深い溜息ためいきをつき、からだをちぢめ、また伸ばそうとこころみたが、睡りねむはもう穏やかにはやって来なかつた。それは幾時の後だか分らないが、彼がふとしとみ葩のすきから庭先に眼をやつた時、愕然として再び起き直つて葩のそばに寄つて外を眺めた。

その池のまわりを殆ど眼を射るように、過ぎるに速い姿があつた。人にちがいがいなく人も女身だつたのだ、誰がこれをはぎ野だといひ切る者がいようぞ、しかも、紛まじう方もないはぎ野だつたのだ、経之は、あれほどの驚きを数刻の前に知つた女が、執拗しつようにしかも既とうに何も彼かも打つちやつて男にあいに行くために、同じ夜半にふたたび庭わたりをしているではないか、凝ぎよう然ぜんとして

経之は呆れ返つたなかに、女のつよさ、一念の剛直さに眼をはなさないでいた。はぎ野の姿は北のやかたの方に消え失せた。

かくまでに女のおもいは猛々しいものであつたか、何者にも恐れず、また、何者にも懲りようとしなない女の心の烈しさ、これは結局、女のまことがこうまで女を走らせているのだ、そこにはうそも、見栄もあろうはずがない、経之はふたたび庭に下りてはぎ野を趁うことのおろかさを感じた。こと、ここまでに至つては何ごとを説こうとしても、説く者に恥があるのだと経之は啞然とするだけだった。

翌朝、経之はあたりに人眼がなかつたので、はぎ野を呼び止めた。

「額の傷は？」

「ごぞんじにあらせられますのに。」

つめたい眼まなざしには、経之も、たじろいだ。しかも、突きすすんで経之のために受けた傷であることを明あからさまに言わないところに、さすがに女らしいものがあり、その分らない経之ではなかつた。

「では何故とがに咎め立てをしないのだ。」

「ほんのかすり傷でございますゆえ、お咎めしても、せんなきように思います。」

はぎ野はわらって見せた。それも、男ゆえに我慢しているのか、経之はうずくような美しさを踏みにじりたかつた。

「そしてそちは、ゆうべ、あれから再び庭をわたって行つたのだ。」

「いいえ。」

はぎ野はかぶりをふつて見せたが、短い間の慌あわてた色は、顔のなかにばらばらに現われた。

「そして一刻の後に立ち戻つたのを見た。」

「いいえ、額の傷のいたみで臥ふすことすら出来ませなんだ、何処どこにも、まいりはいたしませぬ。」

「井のほとりに干してある衣裳の裾には、引き泥のあるのはいかが致した。」

はぎ野は、そこまで見られたことは、知らなかった。経之はた

たみかけて言った。

「そちの顔色蒼白は何のためか。」

はぎ野は思いがけなく、顔を赧あからめた。いくら経之でも、ゆうべの男との仕儀がまさか面おもてにあらわれていはすまいに、それを見ることはないと思つた。

「傷のいたみとしか思われませぬ。」

「教えてやろう、はぎ野、男と寝た女の顔の翌朝の気色けしきは、すぐ分り申すのだ、よごれて疲れているのだ。そちの顔にあられもないう有様がただようている。」

はぎ野はこの言葉をうけとるほど、それほどの男との数々を知っているわけではなかつた。だが、充分えぐに抉り立てられたものは、

彼女のかゆい乳房のうえに覚えあるものをよみがえらせた。

はぎ野は例のりこうげに立ち去ろうとした。

「わたくしこれにて……」

「待て。」

経之は鋭く呼び立った。

「もう一度念を押すがそちはこの家にもはや足をとどめることがあるまいな。」

「はい、いずれは？」

ぎよつとしてはぎ野は思うところに、経之が打^ぶつかつて来たことを知った。

「いずれは去るか。」

「はい。」

きつぱりとした答えだった。

「経之をどうする？」

「あなた様のことはあなた様のこと、わたくしのぞんじ上げるところではございませぬ。」

「そうか、のたれ死の道を選ぶのか。」

経之はかっとして唾を吐いた。

「女の面に礫を打つような酷むごたらしい方には、従つくような女はこの世界のどこにもいはいたしませぬ。」

経之はその言葉の前に、もう、一步もすすめなかつた。やつと彼はやけくそのような言葉を叩きつけた。

「行け。」

はぎ野は簀子のうえから去った。

頭がしんとなるような瞬間は、同時に甚だ空虚な、よい考えなぞ、うかんで来なかった。

数日の後、定明はやかたを出て、行方をくらしましたが、恰度ちようどそれから中一日を置いて、はぎ野も、誰にも何事をも明さずに、やかたを出て行った。しめし合したことは勿論であるが、春が来て秋がなかばになっても、かれらの行方がわからなかった。経之は、母へも何も明さないまま、また、行方をさがすことをしなかった。官の方は辞し北のやかたの戸を閉してしまつたのである。

たくわえもなければ領地もない定明はいずれは、のたれ死をするくらいが落ちであろう、経之はその年も暮れ、ふたたび冬が来、春も近づこうとする頃、北のやかたの守もりびと人のいうには、南野みなみののはてに定明らしい者が屯たむろしているとも言ひ、それは一軒のやかた作りではなく、野の臥戸ふしどのような小屋掛こやがけの中に住んでいゝることだつた。勿論、はぎ野も一緒であつたが、一年に余る野の臥戸ぐらしに衣裳はやぶれ落ち、飯も自ら作することをしないために飢えがちだといふことであつた。

もつと悪い噂は行こうじん人や村家の物を掠め取るといふことが、あたりの人の口の端はに上つていた。もしこれ以上に行人村家の物を掠めるようなことがあれば、村人は野を狩り立てるかも知れない、

それだけでなくも、村人は山麓と野の境には足跡を絶つて近寄らなかつた。

その年の冬は永く続いて寒さと凍^しみは、野の作り物を遅らせ、

夏の初めには飢饉^{ききん}のきざしさ見え、雨は月と月に跨^{またが}つても降ら

なかつた。村人はわずかな菜^{さい}根^{こん}の畠^{はたけ}に見張りをつけるほど、食

物はまるで実らなかつた。その乏しいというよりも殆ど一本の菜

つ葉をかぞえるくらいの畠は、夜にはいると荒らされて盗みの手

がはいった。それはまるで村人同士が、お互の隙間^{すきま}に乗じて畑か

ら畑へとわずかな、しかもかけがえのない菜根を盗みはじめたの

だ、そしてそれらの盗み手は、野^{ふもと}と麓^{ふもと}の境目にいる男女が行うた

盗みのわざというふうに言われた。村人は自分の盗みをなすり付

けるのに、これほど、よい口実がなかった。

村人は寄り合つてこの武家あがりの男をどうして捕えようかと話し合つたが、野の遠くではあり、狩り立てるのにも、武士のこ
とゆえ軽々しく事を行うわけにゆかない。彼らは結局、一つのそ
れが自然にそうなたつたような、或るやましい思い付きを話し合つ
た。

「野に火を放て。」

この案はそれ自体が盗人を退治する、ただ一つの方法であつた。
「誰がしたか分らないように四方から野を焼くのだ、盗人がそこ
で焼き死をするまで火を放て。」

村人は手を拍ち、草も雨がないので枯れているから、よく燃え

るだろうし、追風のある日にはたちまちまっ黒野になってしま
だろうと、その案に喝采かつさいを送ったのである。寄り合いはこうし
て結ばれたのだ。その一人はいった。

「つれの女も焼くのか。」

「女も盗人と同罪だ、女を焼かないで誰を焼くのだ、盗みとい
うやつは女がいつも背後にいるのだ。」

村人はこぞつて追風の立つ日を待った。その間にも或る夜の畑
の中で盗人を見つけた一人の村人が、永追いをして斬られ、深傷ふか
を負った。そして畑の作物は掠み取られ、いやがうえに村人の憤いきどお
りを駆り立てることになったのである。斬られた村人は言った。
若い武士だ、剣のような蒼白い顔立ちをし、古びた太刀をはい

いた。太刀の使い手らしいから用心せよと皆に注意した。まるで疾風はやてのように去つたが、山麓の方に消え失せたとも言つた。

「一刻も猶予すべきではない、当にもならない風の日なぞ待たないで、事を決しようではないか。」

村人は翌日、枯草の山を野の四方に積み立て、折から、やや烈しい追風のあるのを見て、皆こぞつて火を放つ用意をした。草はふるわら古藁のように乾き、野はかまどのように熱く土さえ燃えそうな暑い日になつた。彼らが四方から火をつけようとしたとき、突然、早馬に乗つた一人の武士が、三人の供をつれて疾駆してくる姿を見付けた。馬は野をはすかいによぎつて走つた。

「早く火を放て。」

村人は口々に叫びながら、ついに、火は四方の枯草の上につけられた。火はほんの一刻の間に舐め廻す火先ほさきと火先のつながりから、一さいに大きいひろがりから、塊なに変わって行つた。

恰度ちようどその時、馬上の武士がかれらが逃げようとする、前の道路に立ちふさがつた。村人は一つのかたまりになつて後ろ退すさりに、火をつけた方に戻るような位置になつて行つた。

「火を消すのだ、野を焼くことは大罪になる、火を消せ。」
村人は言つた。

「盗人を焼くのだ、これが何の大罪になるのだ。」

「大罪も大罪、死罪になる、早く消してかかれ、火を消せば罪は咎とがめ立てはせぬから、早くかかれ。」

村人は死罪という言葉にたじろうた。武士はふたたび叫んだ。

「火の元を消さなければことごと悉く死罪を言い付けるぞ。」

村人はなおぐずついている間に、武士は一人の村人を斬った。斬られた百姓はただちに捕えられた。

折から、鐘が鳴り、非常の空気が村人の上に蔽いかかり、なおぐずついでいれば皆召し捕られることに、武士は叫びながらどな吠鳴った。

「火を消せ。」

村人らは自分の放つけた火を消し出したが、生憎あいにくの追風にはもう手の尽しようもなく拵がった火の手は、四方から暗い煙と、粉を吹く火の手にかわり、墨汁のような一面の煙はもう行くところ

まで燃え拡がらなければ、おさまらないふうだった。村人は総出になつたが、火はふくれ拡がり、深く野の胴腹どうばらを抉えぐつて山麓の方に、怒濤どとう状の起伏を音響のある火風になつて押し寄せて行つた。馬上の武士はもう何事も手のつくされないことを知ると、ただ一騎で野をよぎり、山麓の方に向きを据えると、馳はしりに馳つた。火の手は馬上の彼とすれすれの勢いで、或る火の道はほどばしりを上げながら、彼のゆく手を抜いて燃えさかり、馬の脚なみと同じ速力を競うて、燃えついて行つた。

流れがあつた。その流れのあたりに人の通りつけた小径こみちが、ひとりで草の間についていて、小径は山麓と野の境の間にある一つのほら穴の前に、行き尽いていた。ほら穴の入口にも雑草は蔽

うていたが、人が住むために整えられたような穴のへりは、円いなめらかさを持つているのは、疑いもなく誰かが、いるためとしか、思われなかつた。彼が其処そこに走りついた時にも、火の手は背後にも、前にも幾層となく縞目しまめを縋よつて追つていた。わずかな芒すすきや萱かやの節々の燃えはじける音は、一つの交響的なほどばしりになつて寄せた。

「あぶな
危い出ろ。」

馬上の武士のこういう叫び声がつづく、穴の中から一人の男がまるで火の手などを一向に問題にしない、平気な顔付で現われた。そして冷たい圧おしつけるような眼付めつきで馬上の武士を見るといった。

「兄上、何しに見えられた。」

「野に火が放つけられたのだ、早くここを落ちのびろ。」

馬上の武士は経之だった。

「そして何処どこに行けばいいのだ、火の手は眼で見ているのだ。」

「焼死するつもりか。」

「此処ここよりほかに行く処ところがなければ、お察しのとおりでござろう

。」

定明の顔色には、少しの動揺がなかった。

「その覚悟にも後悔はないか。」

「後悔はあるでしょう、だが、今は何も無い、勝手にさせてもらいましよう。」

「では勝手にするがよい、おれはもうすることをしてしまったのだ。」

火はあたりに迫った。暗い煙が穴の前につなみのように寄せた。
「ぼかもの莫迦者、退かぬか。」

「退いてよければ勝手に退くのだ、御辺ごへんのお世話にならぬ。」
その時はじめて経之は或るふしぎな思いに引きもどされた。

「はぎ野は？」

「しらみの虱こじきのわいている乞食武士には、女はいつき申さぬ。」

「なぜ女を斬らなかつたのだ。」

「女は斬れそうで斬れない、はは。」

火は二人のあしもとに、ちろちろ飛んで燃えて来た。もう村人

の声もしない、爆^はぜる音ばかりが続き、凝^じ乎^っとしては熱風で息が窒^つまりそうだった。

「定明。」

「何事。」

「もう一度いうが、立ち退^のいたらどうだ、わが馬のうしろに。」

経之は馬の腰をたたいて見せた。さすがに定明はためらい、眉を伏せるような恰好をして見せたが、次の瞬間にはこの剛情者は頑^{がん}として動じないふうにいった。

「お構いあるな。」

「吐^ぬした、うつけ者、焼けただれてしまえ。」

「熱かったら逃げ申す。」

突如として定明は嗤わらい声を立てた。

彼らはこうして別れた。山の方にやけくそのように登ってゆく不敵な定明は、都の方への道をとらずに、山峡をただ足にまかせてつたつて行つた。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 下」作品社

1982（昭和57）年6月発行

初出：「小説公園」

1951（昭和26）年12月号

※表題は底本では、「野に臥《ふ》す者」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野に臥す者

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>